

第 35 章

ヒラマン 1 - 4 章

はじめに

ヒラマン 1 - 4 章では、善の実と悪の実の違いが鮮やかに提示されている。悪の結果が個人はもちろん社会にまで表れていることが分かる。大変な状況の中でも忠実であった聖徒たちが成長し、祝福を得ている様子は、難しいときに義の原則を誠実に守り通す勇気をわたしたちに与えてくれる。また、悪がもたらす不和と、義によって得られる大いなる平安と喜びを対比することができる。この両者の違いに注目すると、幸せをもたらす原則に基づく道を選ぶようにし、不従順がもたらす悲しみを避けようと思うようになる。

注解

ヒラマン 1:1 - 21 争いは有害である

• ヒラマン書には、ニーファイ人の中にひどい悪がはびこった時期のことが述べられている。ガデアントンの強盗団が栄え、民は悪と滅びの後で悔い改めるものの、また悪に戻るといふ悪循環を何度も繰り返している。これらの苦難の多くは、元をたどれば、ヒラマン書の第 1 章に始まる「争い」にその発端を見ることができるのである。「争い」を大したことの無い罪と考える人がいるかもしれないが、中央幹部は争いの危険性について次のように述べている。

大管長会のジェームズ・E・ファウスト管長（1920 - 2007 年）は、^{きぬ}齒に衣着せぬ言葉で、争いには主の御霊が宿らないと言っている。「それがだれの落ち度であろうと、主の御霊は争いのある所から退きます。」（『聖徒の道』1996 年 7 月号, 48）

• 十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老（1917 - 2008 年）は、争いはサタンが自分の邪悪な目的を遂げるために意図的に引き起こすものであると言っている。「墮落した行為、不正直、争い、いがみ合いなど様々な罪は、この世に偶然生じたものではありません。サタンと彼に従う者たちが激しく戦いを挑んでいる証拠なのです。サタンは人を欺き、惑わし、間違った道に追いやるためにあらゆる手段や道具を用います。」（『聖徒の道』1995 年 1 月号, 83）

• 争いが持つ破壊的な影響力とは対照的に、大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、一致が平安な気持ちをもたらすことを強調している。「人々が御霊とともにいると、調和を期待することができます。御霊はわたしたちの心に真理の証^{あかし}を告げて、その証を分かち合う人々を一つにします。神の御霊は決して争いを起こしません（3 ニーファイ 11:29 参照）。また、不和のもとになる差別感情をもたらしません（ジョセフ・F・スミス、*Gospel Doctrine*, 第 5 版 [1939 年], 131 参照）。むしろ平安と一体感へと導きます。心を一つにするのです。一致した家族、一致した教会、平和な

世界は、心を一つにされることによるのです。」（『聖徒の道』1998 年 7 月号, 71）

ヒラマン 1:27, 33

この二つの節では敵方の扱いが対照的である。どのような違いに気づくか。また、その違いは何によるのか。

ヒラマン 1 - 2 章 社会を破壊しかねない邪悪な秘密の業

• 十二使徒定員会の M・ラッセル・バラード長老は、秘密結社の脅威は現代にもあると説明している。

「モルモン書が教えているように、犯罪にかかわる秘密結社は、個人や家族だけでなく、文明全体にまで深刻な影響を及ぼします。今日の秘密結社には、暴力団や麻薬組織、マフィアなどがあります。現代の組織には、モルモン書の時代の『ガデアントンの強盗たち』と似通った機能があります。彼らは秘密の合図と言葉を持ち、秘密の儀式や入会式に参加します。そして彼らの目的は、『国の法律にも神の律法にも背いて人を殺し、略奪し、盗み、みだらな行いをし、あらゆる悪事を行うこと』なのです〔ヒラマン 6:23〕。

わたしたちが気をつけなければ、現代の秘密結社は、モルモン書の時代とまったく同じように、迅速かつ完璧に、権力と影響力を手にすることができるでしょう。その過程を覚えていますか。秘密結社は、社会の『ひととき悪い者たち』の間で始まりますが、ついには『義人の大半を惑わして』社会全体を汚すのです〔ヒラマン 6:38〕。……

モルモン書は、悪魔が『罪の根源』であり、秘密結社の創設者であると教えています〔ヒラマン 6:30。2 ニーファイ 26:22 参照〕。悪魔は非行グループを含め、『人の子らの心を支配できるかぎり代々』秘密結社を使ってきました〔ヒラマン 6:30〕。その目的は、個人や家族、地域社会、国家を破壊することです〔2 ニーファイ 9:9 参照〕。モルモン書の時代には、かなり成功していました。そして現代では、さらに多くの成果を収めつつあります。だからこそ、わたしたち神権者にとって重要なのは、地域社会の安全のためにできることを行って、真理と正義を守るために堅く立つことなのです。」（『聖徒の道』1998 年 1 月号, 43 - 44）

ヒラマン1-2章 邪悪な組織の目的をくじくことができる善良な人々

・世界貿易センターと米国国防総省の建物がテロリストに襲撃された直後の総大会で、ゴードン・B・ヒンクレー大管長（1910 - 2008 年）は、殺人や独裁、恐怖、悪の支配を助長するテロリストの組織に触れて、次のように語った。

「探し出して壊滅させなければならないのは、テロリストの組織です。」

この教会の会員であるわたしたちは、そのようなグループについてある程度の知識を持っています。モルモン書にはガデアントンの強盗団について記されています。残忍で、誓いの下に結束し、邪悪と破壊を目的とする秘密結社です。当時、彼らは自分たちの利用できるあらゆる手段を使って、教会を滅ぼし、詭弁を弄して人々の支持を求め、社会を支配しました。現在の状況にも同じ要素を見ることができます。



わたしたちは平和を愛する民です。過去も現在も平和の君であるキリストに従っています。けれども、わたしたちは正義と良識を守り、自由と文明を守るために立ち上がらなくてはならない時があります。それは、モロナイが妻子と自由の大義を守るために人々を結集させたのと同じです（アルマ 48：10 参照）。」（『リアホナ』2002 年 1 月号, 84）

ヒラマン3：20 「引き続き神の目から見て正しいことを行った」

・難しい時代にあり、社会が悪の力に脅かされていたときに主の御心を確固として行っていたヒラマンは、困難な末日に生きるわたしたちが従うべき模範である。わたしたちはヒラマンのように、引き続き「正しいこと」を行うよう努めることができる。そうするときに、その結果はついてくるのである（「正しかれ」『賛美歌』151 番参照）。キーワードは、引き続きである。

七十人のスペンサー・J・コンディー長老は、常に善いことを行う方法として、交わした聖約を守ることが大切であると力説している。

「真の改心と罪の赦しを示すすべてのしるしの中でこのこと、すなわち、悪を行う性癖をもう二度と持つことなく、絶えず善を行う望みを持つようになったことが最も重要です。……」

わたしたちは聖約を交わし、聖約を守る度に善を行う性質を強くします。神権の儀式に参加する度に、高い所からの力が下り、わたしたちを天に近づけます。清い心をもって聖餐と神殿の儀式を受け、聖約を忠実に守り続ける人々は、慎み深い服装に身を包むことや、惜しみなく断食献金や什分の一を納めること、知恵の言葉を守ること、あるいは安息日を聖く守ることなどについての指示を必要としません。彼らにはほかの人々に福音を分かち合うこと、頻繁に神殿に参入すること、家族歴史の探究を行うこと、あるいはホームティーチングや家庭訪問を行うことについて厳しく指摘する必要がありません。病人を見舞い、必要な人々に奉仕するように注意を促す必要はありません。

そのような人々は、主の宮で交わした神聖な聖約を守っているいと高き神の聖徒たちです。彼らは、『最後までイエス・キリストに仕える決心をして……自分の罪の赦しを得るようにキリストの御霊を受けたことをその行いによってまことに明らかに』しています（教義と聖約 20：37）。聖約を守る人々は、……奉獻の律法に従って生活しています。彼らの時間と才能と経済的な資産はすべて主に属するものです。

聖約を守ることで彼らは絶えず善を行う性質を伸ばすようになっています。（『リアホナ』2001 年 6 月号, 15, 21）

ヒラマン3：24 - 25 人の繁栄と教会の発展

・七十人の会員として奉仕していたとき、ディーン・L・ラーセン長老は、主への忠実さと繁栄との関係について話した。

「人々が主の御心に添った生活をするときには、神がその子供たちのために用意してくださっている祝福につながる要素が、ことごとく備わってくるようです。愛と一致の精神がみなぎり、天候や気候、自然の力までもがそれにこたえてくれるようです。また、平安と静けさがいつまでも続き、勤勉と進歩が民の生活の特徴となります。……」

……わたしたちは主からある約束を頂いています。主の民がその戒めに従い、与えられている祝福の源として常に主を仰ぎ見ていれば、主がその民に祝福を賜わり、栄えさせてくださるという約束です。（『聖徒の道』1993 年 1 月号, 48 - 49）

ヒラマン3：24 - 26

これらの節から「発展」の意味についてどのようなことが学べるか。それは、世が与える繁栄とどう異なるか。

ヒラマン 3:29 - 30 「神の言葉を手に入れる」

• エズラ・タフト・ベンソン大管長（1899 - 1994 年）は、熱心な聖文研究による以外には得られない祝福があると教えている。「義にかなった成功、まやかしを避け誘惑に打ち勝つ力、日々の生活における導き、心の癒し——これらは主の御言葉を守る者に与えられた約束のほんの一部にしかすぎません。主は約束を果たされないことがあるでしょうか。もしわたしたちが主の御言葉を守るときにこれらのものが与えられると主が言われるならば、確かにその祝福はわたしたちのものとなるはずで
す。けれども、もし守らなければ、祝福は失われてしまいます。どんなに一生懸命にほかのことを行っても、聖文の中にしか見いだせない祝福があります。主の御言葉を守り、それをしっかりとつかんで離さなければ、暗黒の霧の中を進み、命の木に到達することができでしょう。」（『聖徒の道』1986 年 7 月号, 82）



ヒラマン 3:30 「アブラハム、イサク、ヤコブ……とともに座に着かせる」

• 「アブラハム、イサク、ヤコブ……とともに座に着かせる」という言葉は、忠実な者はこの 3 人の偉大な族長に会い、日の栄えの祝福を受けるという意味である。教義と聖約 132:37 によると、「アブラハム〔も〕……イサクもヤコブも、……約束のとおり昇栄に入り、王座に着いている。彼らは天使ではなく、神々なのである。」

十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は、教会員はアブラハム、イサク、ヤコブの祝福を受け継ぐ者になると説明している。

「主が最初にアブラハムと交わり、イサク、ヤコブに再確認された聖約は、何にも勝って重要です。……」

わたしたちも聖約の子孫です。昔の人々のように、神権と永遠の福音を受けました。アブラハム、イサク、ヤコブはわたしたちの先祖で、わたしたちはイスラエルの子孫です。福音と神権の祝福と永遠の命を受ける権利があります。地の国々は、わたしたちの働きにより、またわたしたちの子孫の働きによって祝福されます。文字どおりのアブラハムの子孫と、養子縁組によってその家族に加えられた人々は、約束された祝福を受けます。ただし、主を受け入れて、戒めに従う必要があります。」（『聖徒の道』1995 年 7 月号, 36 - 37 参照）

ヒラマン 3:33 - 34, 36; 4:12 高慢が教会に及ぼす影響

• 高慢は主の教会の中にはなかったとモルモンはあえて指摘しているが、非常に富んでいたために一部の教会員の心は高慢になり始めており（ヒラマン 3:36 参照）、教会全体に悪い影響を与えていた。エズラ・タフト・ベンソン大管長は、これに関連した話をしている。

「高慢の罪が自分の生活や家族、教会に、これまで何をもたらしえてきたか、また今何をもたらしえているか考えてください。」

また悔い改めがもたらすものを考えてください。高慢な思いで、罪の告白と悪い行いを捨て去るのを拒まないかぎり、わたしたちは生活を変え、夫婦のきずなを保ち、家庭を強めることができます（教義と聖約 58:43 参照）。



心を傷つけられて教会に来ていない多くの人々について考えてみてください。彼らは高慢な思いのために、人の過ちを救うことができず、主のテーブルに着くことができないのです。

高慢を取り除けば伝道に出られる大勢の若い男性や夫婦について考えてください。彼らは高慢のために、自分の思いを神に従わせることができません（アルマ 10:6; ヒラマン 3:34 - 35 参照）。

高慢な思いのままに様々なことを追い求めて時間を浪費するよりも、死者のために働くことの方が大切です。それが理解されれば、神殿活動がどれほど活発になるか考えてみてください。」（『聖徒の道』1989 年 7 月号, 7）

• さらに詳しい情報や高慢のサイクルを表す図については、付録から「義と悪のサイクル」（398 ページ）を参照する。

• 十二使徒定員会の D・トッド・クリストファーソン長老は、福音に完全に忠実になる申し分のない方法は、高慢を避け、高慢な心を取り除くことであると教えている。

「イエス・キリストの福音を、単なる影響力ではなく自分をコントロールする影響力、つまり自分の人格の本質的な部分とするには、どうすればよいのでしょうか。……」

第 1 ステップとして、今日の世の中にはびこっている高慢を完全に捨てなければなりません。高慢とは人の生活を治めておられる神の権威を拒絶する態度です。…… 現代ふう

に言い換えるとうなります。『好きなようにやれよ。』『善悪は気分次第で決まるのさ。』このような態度は神への反抗[です。](『リアホナ』2004年5月号, 11)

ヒラマン3:35 心の聖め

• 聖めは、「イエス・キリストの贖罪しよくざいを通して、罪から解放された、純粹で、清く、聖なる状態となる過程（モセ6:59-60）」と定義されている（『聖句ガイド』88）。

• ヒラマンの時代の忠実な教会員は霊的な成長を続け、ついに「心の聖め」を受けた（ヒラマン3:35）。

ジェームズ・E・ファウスト管長は、そのような成長は聖なる御霊みたまの助けによってもたらされると教えている。聖なる御霊は、救い主が望まれるような生き方をしたいという願いをわたしたちの心の奥底にはぐくんでくださるのである。わたしたちはこの過程で聖められる。「キリストのような行いはうわべからではなく人間の心の底からあふれ出てくるものです。そのような行いは福音の儀式で約束されている主の御霊の導きによってもたらされるのです。わたしたちが最も願うべきことはこの神聖な導きによってもたらされる聖めを堪能たんのうすることであり、最も恐れるべきことは、これにまつわる多くの祝福を失うことなのです。」（『聖徒の道』1998年7月号, 21-22）

• ヒラマンの時代の聖徒たちは引き続き善い業に携わり、霊的な資質が強化された。その結果として、聖められた。D・トッド・クリストファーソン長老は、聖めは完成に至る過程の段階の一つであると説明している。「個人が従順の道を忠実に歩むことは、現世で完全な者になることとは少し違います。義とされ、聖められるためにはまず、完全な者にならないと考えている人がいますが、そうではありません。実際にはその反対なのです。義とされ（赦され）、聖められることが、完全な者になるための前提条件です。わたしたちは『キリストによって』のみ完全な者になれるのであって（モロナイ10:32参照）、キリストの助けなしに完全な者となることはできません。裁きの日に憐れみを受けるために必要なことが不断的な努力以外にないのはそのためです。」（“Justification and Sanctification,” *Ensign*, 2001年6月号, 24-25）

ヒラマン3:35 彼らはますます謙遜けんそんになった

• 謙遜の徳を伸ばすことは、当時も今も、忠実な教会員をさらに大きな信仰と喜びへと導く強力な要素である。

「謙遜とは、自分が主に頼らなければならないことを、感謝の思いをもって認めること、すなわち自分が常に主の支えを必要としていることを理解することです。謙遜とは、自分



の才能や能力が神から与えられた賜物たまものであることを認めることです。それは弱さ、臆病おくびょう、恐れを表すものではなく、真の力の源がどこにあるかを自分が知っているということを示すものです。謙遜でありながら恐れを知らない者となることができます。謙遜でありながら勇敢な者となることができます。……

主は御自分の前にへりくだる人を強めてくださいます。」（『真理を守る——福音の参考資料』78-79）

ヒラマン3:35 確固とした信仰

• 教会の強さは、個々の会員の持つ確信の強さにある。ヒラマン3:35には、信仰にも業にも確固とした教会員の生き方が描かれている。

ラッセル・M・ネルソン長老は、そのような確固とした行動と態度は各個人が獲得するものであると指摘している。「皆さんは個人としてのみ、神への堅固な信仰と、個人の祈りに対する熱意を増すことができるのです。個人としてのみ神の戒めを守れます。個人としてのみ悔い改めができます。個人としてのみ救いと昇栄の儀式を受ける資格が得られます。」（『リアホナ』2003年11月号, 44）

ヒラマン3:35 心を神に従わせる

• 「心を神に従わせる」という言葉は、心を神にゆだねる、またはささげることの意味する。心を神に従わせるとき、人は自分の個人的な欲望を捨てて、神の御心みこころに従うのである。十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926-2004年）は、心と魂を神に従わせることは、主に対する最も崇高な形の献身であると教えている。

「〔献身とは〕究極的には、自分自身を神にささげることにはかならないのです。キリストは『心や精神、思い』という言葉かぎを鍵として第一の戒めをまとめておられますが、これは、気が向いたときだけでなく常に求められていることです（マタイ22:37参照）。これを守ればその結果として、わたしたちの行うことは神聖なものとなり、自分自身に永遠の幸いをもたらすものとなるでしょう（2ニーファイ32:9参照）。

そのような態度は、感情や思考、言葉や行いを従順に一致させることを意味し「ます。」（『リアホナ』2002年7月号, 39）

ヒラマン 4:11 – 13

ニーファイの時代の教会員が犯して主の守りを
受けられなくなった重大な罪を、最低 6 つ挙げる。

ヒラマン 4:22 – 26 罪は民を弱める

• M・ラッセル・バラード長老は、次の警告を与えている。「皆さんは自分に正直であり、神と交わした聖約にいつも忠実でなくてはなりません。ちょっとした罪なら大した問題ではないと考えてしまい、わなに陥ることのないようにしてください。『主なるわたしは、ほんのわずかでも罪を見過ごしにすることはないからである』と主はおっしゃいました（教義と聖約 1:31）。……若い人たちの中には、後で神殿や伝道に行きたくなくなったいつでも悔い改めればよいのだから、今罪を犯しても大したことはないという愚かな口実を言う人がいます。このような人は皆、前世とバプテスマの水の中で神と交わした約束を破っているのです。ちょっとした罪ならかまわないという考えは自己を欺くものです。罪は罪です。罪は人の霊性を弱め、常に罪人を永遠の危機に陥れるのです。罪を選ぶことは、たとえ悔い改めるつもりであっても、神に背き、聖約を破ることには違いないのです。」（『聖徒の道』1993 年 7 月号, 6）

理解を深めるために

- モルモンは、「キリストの人」について語っている（ヒラマン 3:29）。あなたはキリストの人とはどのような人だと考えるだろうか。キリストの人になるための目標を 2, 3 立ててみよう。どのような目標を立てることができるだろうか。それらの目標を達成するには何をしなければならないだろうか。
- ヒラマン 3:35 には、確固とした信仰を持つことから得られる祝福が挙げられている。その中で最近あなたが感じた祝福はどれだろうか。これらの祝福を受けるにふさわしくなるために、あなたはどのようなことをしただろうか。

割り当ての提案

- 自分を分析し、これまでの人生で高慢がどのような問題の原因になっていたか考える。そのような高慢を克服するための目標を書き出す。
- 「繁栄」という見出しを書き、その下に、あなたが最近受けた祝福を思いつくかぎり書き出す。